



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「満月四人組デカン高原の旅Ⅲ 奇跡の再会③」

『ラーマヤナ物語』の主人公はラーマ王子とシーター妃である。父王ダジャラタが息子ラーマを追放したのには、忌まわしい因縁話がある。

ダジャラタが若いころ狩りにでかけた。そのとき誤って孝行息子(苦行者)を矢で射てしまったのである。息子の死を知らせるために老いたる両親の元に駆けつけたダジャラタは、彼らが盲目であると知った。正直に自らの罪を認め詫びた。その真摯さ故に許されたが、老父(聖仙)から呪いをかけられた。

その呪いとは、のちに息子を失う苦しみを受けるであろう、というものであった。その因縁によってダジャラタは愛息ラーマを追放せざるをえなかった。聖仙が悲嘆の内に火葬の薪の上に身を横たえたように、王もまた不運の死を迎えることになった。

そろそろ現実の話に戻ろう。

孝行息子は老いたる盲目の父母を天秤籠に乗せて遊行していた。親孝行は儒教の専売特許だが、インドにも孝行物語があった。しかし、これは神話の中でのフィクションである。物語としては面白いが、現実に両親を天秤籠に乗せてインド中を歩くことなど出来るだろうか。

(おおよそ80キロほどの人間二人を担いで、暑いインドを歩くのは大変だぜ)

できる。それを実行した男がいたのである。この男こそ、わが輩が八年余の間“追っかけ”をしていた人物である。

われらは昨日の疲れも厭わず男の村に向かった。村への門は、わが輩の薄れた記憶と一致していた。さらに村道へ入ると集落があった。これも記憶通りであった。しかし、何やら雰囲気違った。

男の実家を覗くと、数名が大釜で煮炊きをしていた。ヴァンダーラーだ。行者に食事を供する施食会のことである。

(何かの祝い事かな・・・)

実家の前の広場に天幕が張られていた。大きな樹の下にベッドが置かれ、そこに座るのは八年前に会ったあの男カイラーシュギリであった。

ギリは、『ラーマヤナ物語』の孝行息子と同じように、老母を天秤籠に乗せてインド中を巡礼していた。その因縁話はこうだ。

あるときギリは木から落ち瀕死の状態になった。母は神に祈った。

「神さま、どうか私の息子を助けて下さい。もし助けていただけたなら、ナルマダー河一周の巡礼を致します」

神さまと約束したにもかかわらず、息子が助かるとすっかり約束を忘れてしまった。ところが老いてくると、母は約束を果たしていないことを思い出した。

「わが息子よ。神さまとの約束どおり巡礼の旅にでたいが、この老いたる身体では叶わない」

それに老母は幼少のころから盲目であった。

「母者よ。案ずることはない。私が天秤棒で担いで巡礼致しましょう」

ナルマダー河は総延長1,312キロである。(鹿児島/青森飛行距離1,336キロ)一周すると2,624キロにもなる。老母といえども体重は40キロほどになる。前籠に老母を乗せ、バランスを取るために後籠に40キロ程の鍋釜を乗せると70～80キロの重さになる。

神さまとの約束どおり巡礼は満願成就したが、母は言った。

「さらに神さまを求めて巡礼したい」

ギリは母の願いを受け入れ南の聖地ラーメーシュワラム(約2,300キロ)へ下って行った。そこから北上するとき、わが輩と出会った。

「おお！ ギリさんよ。久しぶりだね。わが輩のことを覚えているかい」

ギリはわが輩のことを覚えていた。感動的な再会だ。

「ギリさまは、昨日この村に帰ってきた」

誰かが言った。目の玉が飛び出るほど驚いた。

「奇跡だ！ これは間違いなく奇跡だ。神のお導きだ」

昨年ヒマラヤ山中で遭遇した老夫婦の行者が「いる」と言ったので、巡礼を中止して村に帰っているものだとばかりわが輩は思っていた。途中で病気をして入院したニュースも聞いていた。

われら四人組は偶然旅に出た。ジャバルプルに着いたのは2月1日であった。それと同じ日にギリ親子が18年ぶりに故郷に帰ってきた。これも偶然だ。そしてこの御目出度い祝いの日われらが村に入った。これも偶然だ。

(そうだろうか・・・)

2月1日には意味があった。これを考察し、この奇跡の意味を考えてみたい。

いよいよこの奇跡譚の締めくくりだ。乞うご期待。